

伊藤高雄 提出 学位申請論文

『言語伝承文化論』 審査要旨

論文の内容と要旨

申請論文は、序章「言語伝承文化論」の内容と目的、第一部折口信夫の方法（全五章）、第二部ことば遊びの民俗学（全五章）、第三部万葉びとの言語伝承文化論（全五章）、終章本研究の概要と課題 から成る四二七頁の論文である。

序章は、標題の通りこの論文の課題を述べたもので、ここでいう「言語伝承」とは、「『方言』をはじめとしたささやかなことばのピースをはじめ、ことわざから『文学伝承』まで含めた、ある独特の型をもつようになった『非文学』から『文学』へと展開される中に内包された言語運用の民俗の総体」であると、その

概念を規定する。その上で、柳田國男と折口信夫による、日本各地に伝承されている民俗的な事象を指し示す「ことば」の解析による文化研究の方法を検討しながら、自らも「ことばの意味と使われ方の両面から日本文化の特性や深層を再発見するのが目的である」とする。

第一部「折口信夫の方法」は、折口がいう「言語伝承」論の根柢となっている「ことば（言語）」そのものの捉え方について論じた部で、五章にわたって折口の言語伝承論に関する方法論を検討する。

第一章「折口信夫の方法と実践―『万葉集』のことばと伝承素」では、折口が『万葉集』に詠われている「ことば」を理解する際に、どのような方法的な立場をとり、具体的にどのようなように解析し、読み取ろうとしたのかを折口の論述から整理・分析する。折口信夫の言語認識の方向性には、柳田國男と同様、ことばの発生の現場に迫ろうとする遡源的・発生論的姿勢が顕著であることを明らかにしている。具体的には、同音異義語や民間語源解（フォーク・エチモロジー）、類語

や反対語をも視野に入れた上で、民俗生活の中に生きることばの、比喩やまじない（感染呪術）といった対象への働きかけに重点においた読み解きがなされていると指摘する。

こうした折口の方法を踏まえた上で、この章では木簡の出土などで脚光を浴びた「安積香山の歌」の発想をめぐって、歌ことばに伝承された呪祷のことばの実際を、アサヤカゲという用語のあり方から再考し、呪祷のことばに累積された〈伝承素〉とでも呼ぶべき、言語伝承の要素を措置し、ことばの伝承と創造の仕組みを説明することの意義について論ずる。

第二章「まれびとと異族―国文学の発生」は、折口語彙として重要な意味をもつ「まれびと」の成立と、「まれびと」論の形成について論じている。折口の「まれびと」論の形成については、折口が師柳田國男との座談会で発言した、沖縄でその内容を読んだという台湾の『蕃族調査報告書』が重要な契機となっている。これは折口が自ら発言していることであるが、この章では、「まれびと」論

形成の直接的なヒントとなった可能性を『蕃族調査報告書』の排灣族（パイワン族）・獅設族（サイシャット族の古称）の伝承などを取り上げて具体的に論じ、あわせて折口の思考活動に影響を与えた民族心理学などの諸要素についても触れる。

第三章「古代」への歩行―旅と学問」では、民俗学という学問の重要な方法の一つであり、折口信夫の学問形成にも深い影響を与えたと見られる、折口自身の「旅」のありようを論ずる。具体的には、折口個人の旅の履歴と学問的な成果とを重ね合わせつつ、『古代研究』成立以前の旅のうち、特に大正九年（一九二〇）の旅を取り上げた上で、「せんちめんたる」という一見否定的な情動が折口の学問的情熱の根幹となっていることを指摘し、折口が自信を持って使った「実感」という用語と「せんちめんたる」との間に注意を向けることによって、彼の学問的な方法が見えてくると説く。

第四章「折口信夫の方法と国学―国文学研究の根柢」では、折口の学問の根幹

にある国学者としての意識と文学研究の根本的スタンスについて、その言説を整理した上で、折口がさまざまな意味で影響を受けたと認められる国学者について取り上げ、折口信夫の学問形成のありようを検討する。

第五章「へ万葉びと」論―折口信夫の方法と射程」は、これも折口語彙として知られた「万葉びと」という術語が、本来、どのような概念を持っていたのかを確認し、その術語の形成を折口の独自の造語法から検証するとともに、「万葉びと」という術語を措置することで、折口信夫が文学研究の射程をどのように意図したかを論ずる。折口が用いた術語「万葉びと」の初出は、大正四、五年頃（一九一五、六）で、岩野泡鳴の思想的立場に影響を受けつつ創出されたそれは、古代人の原型的な「生命」への思いに一体化するための方法的概念であること、さらに、単に古代という時空に留まらない、これから生きるための憧れとしての「異郷」を描き出すことまで含んだ、すぐれて戦略的な文学研究の射程をもつ術語であることを指摘する。

第二部「ことば遊びの民俗学」は、「ことば遊び」という言語運用による文化を検討する部で、この部も五章によって構成されている。

第一章「ことば遊び研究の現状と課題―ことわざ・なぞ・洒落の宇宙」は、まず、ことばの民俗の総体を「ことば遊び」というカテゴリーの中で位置づけ、柳田國男以来、日本民俗学の領域で進められてきた研究の現状を整理し、ことば遊びの具体的内容を概観する。その上で、民俗行事などの中には多くの口誦句が含まれており、こうした口誦句に視点を据えた口誦民俗論という研究法を示し、これによる今後のことば遊び研究の可能性を論ずる。

第二章「ことば遊びの世界」は、日本文化の中に見られることば遊びの伝統について、語呂合わせ、むだ口、流行語など身近に生きてきたことばの伝承をもとに、改めて「ことば遊び」の定義を行った上で、時間と空間の両面から具体的に正月言葉、悪口、悪場所、境界性、その担い手などについて検討を加えている。

第三章「悪口雑言」は、ことばをめぐる民俗の中で特色ある位置をしめている

「悪口雑言」の民俗を取り上げる。具体的には、栃木県足利市に伝わる大晦日の悪態祭りを基点に、全国の悪口雑言神事を概観し、歴史的に悪口雑言の民俗がどのような展開を見せて今日に至るのか、法と呪術のはざまに生きた中世のことは戦いの様相や古代の歌垣におけることば争いについて論じ、日本の伝統的な社会に通底した悪口雑言の民俗の特色について説く。

第四章「コの話からはじまって―柳田民俗学とことば」、第五章「蚕をめぐる精神誌―伝承素としてのことば」は、日本のことばの伝承の実際について、山形県や福島県、長野県などでの民俗探訪をもとに分析する。第四章では、はじめにコという音によって表現される子、籠、蚕、海鼠などのことばを古典や民俗事例から取り上げ、これを柳田國男の言語認識と対比させて検討する。第五章では、第四章を踏まえて、古来日本人が衣や蚕にいだいてきた信仰的・精神的側面について論じている。

第三部「万葉びとの言語伝承文化論」では、万葉びとの言語伝承の生成と動態

についての論考をまとめた部で、五章によって構成されている。

第一章「言霊の信仰」では、『万葉集』に伝わる「言霊」の信仰をめぐって、その原質について、原型的なことばの信仰のあり方を考え、ついで律令制の時代に展開したことばの民俗の様相と、「語り継ぐ」時代から「記し継ぐ」時代に展開する万葉びととことばとの関係の変容の様相について論ずる。

第二章「恋と呪歌」は、万葉第三期の代表的な女流歌人の一人、大伴坂上郎女の巻四の五二七番歌と『万葉集』巻十一の作者未詳二六四〇番歌との比較をもとにして、両者に共通する同音反復という表現技法に注目する。その上で、ことばの民俗の、文学の創造への働きかけについて検討する。さらに巻十一・十二に集積された類同した恋歌の存在に注目し、万葉びとの生活における歌の呪術的な機能と、恋をめぐる心意との関わりを論ずる。

第三章「へ伝承」の基層にあるもの——有間皇子異聞」は、孝徳天皇の皇子でありながら、謀反の疑いで刑死した有間皇子の自傷歌群について、その資料的な位

置を見定め、その伝承が中世的に変容されながらも伝承されていく過程を検討する。その上で、〈貴種流離〉という同様の話型をもつ説経「愛護若」などと比較し、『万葉集』卷二の挽歌部冒頭を飾る本歌群が、首皇子（のちの聖武天皇）の誕生から立太子、即位という過程に対応して、皇位継承の悲劇の皇子有間の慰霊鎮魂の意図をもって収載された作品群ではないかと論ずる。

第四章「雪のことほぎ―天武天皇と藤原夫人の唱和歌」は、『万葉集』卷二に伝わる天武天皇と藤原夫人の唱和歌（卷二の一〇三・一〇四）をめぐって、古代飛鳥の風土を文献上の記述と民俗探訪の成果をもとに環境的に再確認しながら、唱和歌に詠み込まれた歌ことばの表現を読み解き、それが飛鳥浄御原宮の安泰と繁栄をことほいだ寿歌であることを論ずる。

第五章「ふたつの大君讃歌―人麻呂と雷岳」は、『万葉集』卷三に載る、柿本人麻呂の「雷岳の歌」（二三五番歌）の本文の歌と異伝の歌の表現と発想をめぐって論じたものである。具体的には、当該歌に見える本文歌と左注歌との二つの

異伝の表現や発想の異同に注意しながら、研究史を批判的に検証し、この二つの異伝の差異を表現レベルから定位した上で、歌われた時代の環境の中で作品の表現の差を読み解き、この二つの大君讚歌が共に、持統朝の安泰や天武皇統永続の願いを理念化した、それぞれ雷神制圧（本文歌）および雷神慰撫（左注歌）のはたらきを持った作品であることを論ずる。

終章「本研究の概要と課題」では、各部、各章での論述を要約し、まとめるとともに、今後の研究課題を明らかにする。研究課題としては、折口信夫の「ことば」に対する思考過程の検討、柳田國男の言語認識の方法についての検証、具体的な言語伝承文化については、所謂「民俗語彙」と呼ばれる伝承語についての再分析と体系化、俳諧連歌における言語伝承のありようなどをあげる。

論文審査の結果の要旨

伊藤高雄の「言語伝承文化論」は、折口信夫や柳田國男による言語伝承論、あるいは所謂「民俗語彙」という伝承語の研究などを踏まえつつ自らの実地調査の成果も含めて、日本における言語伝承の実相と、その特質を民俗学的に明らかにしようとした論文である。

論文は、序章「言語伝承文化論」の内容と目的、第一部折口信夫の方法（全五章）、第二部ことば遊びの民俗学（全五章）、第二部万葉びとの言語伝承文化論（全五章）、終章本研究の概要と課題という構成をもつ。この構成からもうかがえるように、この研究は、言語伝承文化研究に関する折口信夫らの方法論の研究、諺・謎・洒落など実際のことば遊び伝承からの研究、『万葉集』に収録された歌からの研究という枠組みをもち、言語伝承文化を通時代的に捉えようとしているところに独自性が認められる。「言語伝承」という用語は、折口信夫による民俗

伝承の分類の一つとして昭和九年（一九三四）に提示されたもので、このことから伊藤が折口の言語伝承論を重視するのは、首肯できる。

折口の言語伝承に関する研究の検証からは、折口の言語認識の方向性には、「ことば」の発生の現場に迫ろうとする遡源的・発生論的視点と語義論的視点の二つがあり、具体的には同音異義語と民間語源解（フォーク・エチモロジー）からの語源研究、類語や反対語との比較研究、比喩表現の意味研究などいくつかの研究に分けられると指摘する。折口の言語伝承論についての議論は、従来の研究では卒業論文でもある「言語情調論」が中心であったが、伊藤の論文によって、これが拡大されたと評価できる。また、伊藤はこうした折口の言語伝承に関する視点と研究方法を援用し、『万葉集』卷十六・三八〇七番歌の安積香山の歌とその後の『大和物語』の説話などを関連づけて分析することで、歌表現にある「アサ」「カゲ」ということばの果たす役割を見いだし、伝承される「ことば」には、時と場の制約を受けながらも後世に引き継がれる言語表現の「伝承素」とも

いえる「ことば」の存在を明らかにしている。これが言語伝承の特質の一つであり、ここから「ことば」の伝承と創造の仕組みが解明できるのではないかという。今後、さらなる検証が必要となる、意味のある重要な指摘といえよう。

この論文では折口による「まれびと」「万葉びと」という術語の形成過程とこの術語がもつ意味についても論じられている。それは「まれびと」「ほかびびと」の論理形成と台湾原住民族文化との関係を具体的に明らかにし、「万葉びと」という語は、自らが対象と同一化して作者の感情生活を追体験するという、すぐれて方法的な術語であることを明らかにしている。これらの論考は、伊藤論文では折口の言語伝承論に奥行きを与えるに止まっているが、伊藤論文を敷衍すれば、こうした術語の形成には、折口の遡源的・発生論的な言語認識が深くかかわっていることがうかがえる。

言語行為を取り上げた論述は「ことば遊び」という括りで示されている。言語伝承文化には、言語行為が存在することは言うまでもなく、伊藤論文では諺、謎、

洒落、語呂合わせ、無駄口、流行語が取り上げられている。こうした中で特に注目されるのが、第二部にある「悪口」という行為とその「ことば」についての分析と、第三部にある同音反復という「ことば」の技法についての論述である。

「悪口雑言」については、栃木県足利市の最勝寺（毘沙門様）の悪態市をはじめ、全国各地の悪口雑言をとまなう祭りを概観し、こうした祭りはほぼ全国的に存在することを明らかにし、その特色は特定の「トキ」（時）に限定されていることにあると指摘する。そして、「悪口雑言」という言語による伝承文化は、中世の軍記物にも見られ、これを「詞だたかひ」といい、また中世末には「城はやし」「言葉戦い」という用語も存在することを史料もあげて分析している。そして、さらに古代の悪口雑言に目を向け、『万葉集』巻十六にある掛け合的な悪口なども取り上げている。つまり、この言語行為は通時代的に存在する傾向があることを明らかにしている。

同音反復という「ことば」の技法は、『万葉集』巻十一、十二の恋歌からの問

題提起で、二六四〇番歌の「来」と「来ず」のような同語同音反復などについて、類例をあげての分析を踏まえ、こうした技法は民俗文化の中で培われたもので、文学以前の呪的機能を受け継いだものであると推測している。そして歌のなかでの同音反復は、歌が訴える機能を増幅させる技法で、呪歌の場合はその呪力を増幅させると考えられたと指摘する。

このように本論文には、言語による伝承文化、あるいは言語伝承という文化継承のあり方についての、重要な指摘がいくつもあるものの、先に述べたように折口の言語認識と折口による術語との関係性、「悪口雑言」という言語行為とその「ことば」への分析などは、十分とはいえない。また、論文標題でもある「言語伝承文化」の文化総体での位置づけや、文化継承の方法である「伝承」という行為の意味づけなどは今後の課題と言わざるを得ない。

本論文にはこうした論述の不十分さがあるが、記載文芸と口承としての言語伝承を積極的に関連づけながら、言語伝承文化の実相と通時代性の一面を明らかに

している。また、残された課題からは、この分野の研究をさらに深化させる可能性をもつ。よって本論文の提出者伊藤高雄は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があると認められる。

平成二十五年七月十七日

主査	國學院大學教授	小川直之	印
副査	國學院大學教授	辰巳正明	印
副査	國學院大學教授	新谷尚紀	印